



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	日本語の「が」と「は」に関する覚え書き A Note on ga and wa in Japanese
Author(s)	郡司 隆男 (GUNJI Takao)
Citation	神戸松蔭女子学院大学研究紀要言語科学研究所篇 Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin , No.15 : 1-10
Issue Date	2012
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

日本語の「が」と「は」に関する覚え書き*

郡司 隆男

神戸松蔭女子学院大学 言語科学研究所

gunji@shoin.ac.jp

A Note on *ga* and *wa* in Japanese

GUNJI Takao

Shoin Institute for Linguistic Sciences, Kobe Shoin Women's University

Abstract

本稿では、日本語の「が」と「は」の用法を論じる。従来、これらの接辞が複数の意味用法をもつことが指摘され、それらに対して直感的な特徴付けがなされてきたが、本稿では、形式意味論による記述を提示することを試み、真理条件と前提との区別に基づいて、それぞれの用法の違いを明らかにする。

In this article, I will discuss the usage of Japanese particles *ga* and *wa*. Traditionally, multiple meanings of these particles have been proposed and given intuitive characterization. I will try to give formal semantic descriptions of the variety of meanings of these particles, based on the distinction between assertion and presupposition.

キーワード: 「が」と「は」、中立叙述、総記、主題、対比、前提、真理条件

Key Words: *ga* and *wa*, neutral description, exhaustive listing, topic, contrastive, presupposition, truth condition

1. はじめに

日本語文法において2つの助詞「が」と「は」は従来その用法について数多くの研究がなされてきた。中でも、Kuno (1973) による、「は」と「が」のそれぞれがもつ2つの

*本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(B)「焦点・スコープ現象の統語・意味論的分析と音声実験・コーパス調査による検証」(平成21年度～平成24年度、研究代表者: 西垣内 泰介、課題番号: 21320084) による援助を受けている。

用法の区別はその後しばしば引用されてきている。以下にそれぞれの用法と、例文、それに対する直感的な言い換えをあげる。

(1) 「が」の2つの用法

- a. 中立叙述: (この会場には) 女の子が多い。 — [女の子の数についての報告]
- b. 総記: 奈緒美が賢い。 — 奈緒美だけが賢い。

(2) 「は」の2つの用法

- a. 主題: 奈緒美は賢い。 — 奈緒美について言えば、彼女は賢い。
- b. 対比: 女の子は賢い。 — 男の子と異なり、女の子は賢い。

本稿では、これらの用法について、形式意味論での意味記述を与えるを試みる。

2. 「が」の2つの用法と量化

Gunji (1987, p. 199) において、「が」の2つの用法について、次のような文に対して、これを量化の演算子の違いととらえ、意味表示においても、全称量化と存在量化において最小対をなすということを示唆した (≡ は双条件をあらわす)。

(3) a. 奈緒美が賢い。(中立叙述)

$$\exists x [x = n \equiv \text{Wise}(x)]$$

b. 奈緒美が賢い。(総記)

$$\forall x [x = n \equiv \text{Wise}(x)]$$

ここで、(3b) は総記の「が」に対する次のような意味論を基にしている (Gunji, 1987, p. 192)。

(4) *Semantics of Exhaustivization*

In exhaustivization: $M \rightarrow A H$,

$$\llbracket M \rrbracket = \forall x [\llbracket A \rrbracket (\lambda y [y = x]) \equiv \llbracket H \rrbracket]$$

ここで、 A は付加詞句として扱っている、総記の「～が」という句、 H はそれが付加する主要部としての文 (の一部) である。

これは、総記の「が」に次のような語彙的意味を与えることに等しい。ここで、 \mathcal{P} は一般化量化子のタイプ $\langle \langle e, t \rangle, t \rangle$ の変数、 P は一項述語のタイプ $\langle e, t \rangle$ の変数である。

(5) 総記の「が」の意味論

$$\llbracket \text{が} \rrbracket = \lambda \mathcal{P} \lambda P \forall x [\mathcal{P} (\lambda y [y = x]) \equiv P(x)]$$

本稿では、上記の意味論が総記の「が」の意味を正しくとらえているかを再検討することにする。

3. 英語の **only** の前提による分析

日本語では、「が」でなく「だけが」を用いた方が、より総記の意味が強くなる。「だけが」を含む文は、基本的に英語の **only** と同じように次のように表示できるだろう。

- (6) 奈緒美だけが賢い。

$$\forall x [Wise(x) \rightarrow x = n]$$

以下では、この表記を英語の **only** の古典的な分析と比較してみる。

Horn (1969) では、従来、真理条件の中に含まれていた **only** や **even** の意味の一部を前提 (presupposition) とすることが提案されている。例えば、次の (7a) の文は (7b) の前提と (7c) の真理条件 (assertion) をもつ。

- (7) a. Only Naomi is wise.
 b. P: *Wise(n)*
 c. A: $\neg \exists y [y \neq n \wedge Wise(y)]$

つまり、[**only DP**] VP は、DP 以外の誰も VP を満たしていないということを主張するが、DP が VP を満たしているということはあくまでも前提でしかないとする。

その根拠の一つは否定文あるいは疑問文における振る舞いである。

- (8) a. It is not the case that only Naomi is wise.
 b. Is only Naomi wise?

例えば、(8b) に対して、次の (9a, b) のような反応は可能だが、(9c) のような反応は不可能である。

- (9) a. Ken is too.
 b. Someone else is as well, but I forgot who.
 c. *She isn't.

(9a, b) は真理条件である (7c) の部分への異義なので、(8b) への反応として適切だが、(9c) は前提である (7b) への異義なので、適切ではない。¹

4. 日本語の「が」

4.1 日本語の「だけが」

前述の Gunji (1987) の分析では、前提を導入せずに、すべてを真理条件の中に入れていく。この場合、Horn の指摘する、否定や質問への答に関する問題がどのようなかを考えてみる。

まず、「だけが」を含む文に対して次のような疑問文を用いたテストを試みる。

¹一般に前提は取り消し可能 (cancellable) であるとされるので、(7b) が前提であるのならば、(9c) によって取り消すことも可能であるはずである。しかし、(9c) の容認度がかなり悪いであるとすると、(7b) は慣習的含意 (conventional implicature) (cf. Grice (1968), Karttunen and Peters (1979), Potts (2005)) であるとした方がよいかもしれない。いずれにせよ、真理条件とは別のものであると考えることになる。本稿では以下、これを「前提」と呼んでいくことにする。

(10) 奈緒美だけが賢いですか?

(11) a. いえ、健も賢いです。

b. ?いえ、彼女は賢くないです。

「奈緒美だけが」の場合、英語の *only Naomi* と同じように振る舞う。(11a) のように、「賢いのは奈緒美だけではない」という反応をすることは適切だが、(11b) のように、*Wise(n)* で表記される命題に異義を唱えることは奇妙に響く。ここで、(6) と Horn の前提、真理条件を比べてみよう。

(6) 奈緒美だけが賢い。

$$\forall x[Wise(x) \rightarrow x = n]$$

(7) a. Only Naomi is wise.

b. P: *Wise(n)*

c. A: $\neg \exists y[y \neq n \wedge Wise(y)]$

(7c) は次と等価である。

$$(12) \quad \forall y \neg[y \neq n \wedge Wise(y)] \Leftrightarrow \forall y[y = n \vee \neg Wise(y)] \Leftrightarrow \forall y[Wise(y) \rightarrow y = n]$$

つまり、先にあげた「だけが」に対する意味表記は、Horn の真理条件 (assertion 部) と全く同じである。

したがって、「奈緒美だけが賢い」に関して与えた意味表記には *Wise(n)* で表記される命題は含まれていないことになる。その意味では、先に見たように、(11) のような反応は合理的であると考えられる。

しかし、*Wise(n)* という命題が成り立たない場合に「奈緒美だけが賢い」と言うことは明らかに不適切なので、Horn の主張するように、*Wise(n)* という命題は前提として置いておくべきだろう。

したがって、(6) を精密化して、「奈緒美だけが賢い」は次のような前提と真理条件をもつとする。

(13) a. 奈緒美だけが賢い。

b. P: *Wise(n)*

c. A: $\forall x[Wise(x) \rightarrow x = n]$

4.2 中立叙述の「が」

次に中立叙述の「が」を考える。同じように疑問文を作りそれに対する反応を考察する。²

²主文で「が」を使う場合には、中立叙述の解釈がややむずかしくなるが、ここでは解釈を中立叙述に固定して話を進める。

もっとも自然な疑問文は例えば次のようなものだろうが、その場合、追加した「ということ」の意味的な貢献を考慮しないといけなくなるので、ここでは、話を単純化して考える。

(i) 奈緒美が賢いということですか?

(14) 奈緒美が賢いですか? (中立叙述)

(15) a. ?いえ、健も賢いです。

b. いえ、彼女は賢くないです。

中立叙述の「奈緒美が」の場合、「奈緒美だけ」という論理的含意はないので、(15a)は奇妙に響く。一方、(15b)のような、*Wise(n)* という命題の否定は問題ない。すなわち、中立叙述の「が」の場合には、真理条件の中に *Wise(n)* という命題が含まれると考えられる。

したがって、「奈緒美が賢い」の中立叙述の解釈の場合は次のような真理条件をもち、特に前提はもたない。

(16) a. 奈緒美が賢い。(中立叙述)

b. P: —

c. A: *Wise(n)*

4.3 総記の「が」

最後に総記の「が」を考える。総記の「が」には *only* の意味が含まれているとされるが、それは前提なのか真理条件なのかが問題である。上で見たように「だけが」の場合には、英語の *only* と同様にふるまうが、総記の「が」の場合は「だけが」との違いがあるのだろうか?

Gunji (1987) で与えた、総記の「が」の意味論は、英語の *only* を双方向の含意としたものになっている。

(3) b. 奈緒美が賢い。

$$\forall x [x = n \equiv \text{Wise}(x)] \Leftrightarrow \forall x [[x = n \rightarrow \text{Wise}(x)] \wedge [\text{Wise}(x) \rightarrow x = n]]$$

論理式の前半は「奈緒美であれば賢い」、後半は「賢いならば奈緒美だ」すなわち「奈緒美だけが賢い」となっている。つまり、総記の「奈緒美が賢い」はこれら2つの文の連言となっている。このそれぞれが前提であるのか真理条件であるのかは、疑問文のテストによって確認できる。

(17) 奈緒美が賢いですか? (総記)

(18) a. ??いえ、健も賢いです。

b. ?いえ、彼女は賢くないです。

この場合、どちらの反応も若干奇妙に響くが、特に、(18a) が奇妙であるということは、総記の「が」においては、「だけが」の読みは真理条件とは別のものであり、前提であることを示唆している。一方、(18b) の容認度の低さに問題はあるものの、真理条件としては、*Wise(n)* があるとしてよいだろう。すると、(3b) の論理式の前半は真理条件からの含

意として得られるので、前提としては後半だけを設定しておけばよい。この前提は「だけが」の真理条件と同じである。

したがって、「奈緒美が賢い」の総記の解釈の場合、次のような前提と真理条件をもつ。

- (19) a. 奈緒美が賢い。(総記)
 b. $P: \forall x [Wise(x) \rightarrow x = n]$
 c. $A: Wise(n)$

以上をまとめると、次の3種の文に対して、前提と真理条件は次のように定義するのが適切であると考えられる。

- (20) a. 奈緒美が賢い。(中立叙述)
 $P: \text{—}$
 $A: Wise(n) \Leftrightarrow \exists x [x = n \equiv Wise(x)]$
 b. 奈緒美が賢い。(総記)
 $P: \forall x [Wise(x) \rightarrow x = n]$
 $A: Wise(n)$
 c. 奈緒美だけが賢い。
 $P: Wise(n)$
 $A: \forall x [Wise(x) \rightarrow x = n]$

すなわち、「が」の2つの用法は量子子における最小対であることに加えて、中立叙述の場合には存在量化が assertion 部で、総記の場合には全称量化が presupposition 部で表記されるという対立となっている。また、明示的に「だけが」とした場合と総記との違いは assertion 部と presupposition 部にそれぞれ何を置くかの違いであり、両者はこの意味でも最小対となっている。

5. 「は」の2つの用法

5.1 主題の「は」

主題の「は」に対しては、Gunji (1987, p. 170) で次のような意味論を与えている。

(21) *Semantics of Topicalization*

In topicalization: $M \rightarrow A H$,

$\llbracket M \rrbracket = \llbracket A \rrbracket (\lambda x R(x, \llbracket H \rrbracket))$,

where R is a contextual relation between an individual and a proposition, whose semantic and pragmatic content is dependent on the context.

すなわち、「は」を伴う主題が文の他の部分と文脈から定まる何らかの関係をもつという一般的な規定である。これによると、「奈緒美は賢い」という文は次のような意味表記をもつことになる。

(22) a. 奈緒美は賢い。(主題)

b. $R(n, \text{Wise}(n))$

これも、疑問文によるテストで、前提なのか真理条件なのか確認してみる。

(23) 奈緒美は賢いですか? (主題)

(24) a. ?いえ、健も賢いです。

b. いえ、彼女は賢くないです。

(22b) の意味表示では、 $\text{Wise}(n)$ の部分が外に出ていないが、(24b) から見るように、 $\text{Wise}(n)$ は明らかに真理条件である。一方、(24a) に見るように、それ以外は真理条件とはなっていない。

では、(22b) の表記は何をあらわしているのだろうか。文脈から想定される一定の関係というのは漠然としているが、前提とするのが妥当であろう。したがって、主題の「は」の場合には、次のように表記するのが適切であると思われる。

(25) 奈緒美は賢い。(主題)

P: $R(n, \text{Wise}(n))$

A: $\text{Wise}(n)$

5.2 対比の「は」

最後に対比の「は」を考える。Gunji (1987) では対比の「は」は扱っていないが、[[DP は] VP] においては、直感的に、DP 以外の個体に VP でないものがあるという含意がある。これが前提なのか真理条件なのかを疑問文のテストによって調べてみる。

(26) 奈緒美は賢いですか? (対比)

(27) a. ?いえ、健も賢いです。

b. いえ、彼女は賢くないです。

テストの結果は主題のときと同じように見える。したがって、真理条件としては $\text{Wise}(n)$ だけが存在すると考えてよいだろう。DP 以外の個体は VP でないという直感的な含意は前提であると考えられる。

(28) 奈緒美は賢い。(対比)

P: $\exists x [x \neq n \wedge \neg \text{Wise}(x)]$

A: $\text{Wise}(n)$

以上から、「は」の2つの用法の違いは、前提における違いであるということがわかる。

6. 普通名詞の意味論

今までは主語が固有名である単純な場合を考えてきたが、主語が普通名詞である場合にはどうなるかを考えておきたい。

主語が複数の場合も含む普通名詞の場合には、直感的な表示は次のようになると思われる。

- (29) a. 女の子が賢い。(中立叙述)

$$\exists x [Girl(x) \wedge Wise(x)]$$

- b. 女の子が賢い。(総記)

$$\forall x [Girl(x) \rightarrow Wise(x)]$$

- c. 女の子だけが賢い。

$$\forall x [Wise(x) \rightarrow Girl(x)]$$

これらが前提なのか真理条件なのかをテストしてみる。

- (30) 女の子が賢いですか？(中立叙述)

- (31) a. ?いえ、男の子も賢いです。

- b. いえ、女の子は賢くないです。

中立叙述では先と同様に、上の論理表記は真理条件であると思われる。

- (32) 女の子が賢いですか？(総記)

- (33) a. ??いえ、男の子も賢いです。

- b. ?いえ、女の子は賢くないです。

総記の場合、若干弱いが中立叙述と同様の真理条件をもつと思われる。

- (34) 女の子だけが賢いですか？

- (35) a. いえ、男の子も賢いです。

- b. ?いえ、女の子は賢くないです。

この場合、明らかに、「が」単独の場合とは異なり、真理条件は「女の子以外に賢いものはない」という部分になる。一方、「女の子が賢い」という含意は前提であると考えられる。

以上から、次の3種の文に対して、前提と真理条件は次のように定義するとが適切であると考えられる。

- (36) a. 女の子が賢い。(中立叙述)

P: —

$$A: \exists x [Girl(x) \wedge Wise(x)]$$

- b. 女の子が賢い。(総記)
 $P: \forall x [Wise(x) \rightarrow Girl(x)]$
 $A: \exists x [Girl(x) \wedge Wise(x)]$
- c. 女の子だけが賢い。
 $P: \exists x [Girl(x) \wedge Wise(x)]$
 $A: \forall x [Wise(x) \rightarrow Girl(x)]$

最後に「は」の2つの用法について考えよう。

- (37) 女の子は賢いですか? (主題)
- (38) a. ?いえ、男の子も賢いです。
 b. いえ、女の子は賢くないです。
- (39) 女の子は賢いですか? (対比)
- (40) a. ?いえ、男の子も賢いです。
 b. いえ、女の子は賢くないです。

テストの結果は同じであり、真理条件においては差はないことになる。固有名の場合と同様に、前提として、主題の場合には、女の子と彼女らが賢いことの間に文脈依存の関係があること、対比の場合には、女の子以外に賢くないものがあることを設定するのが自然と思われるので、次のような表記になる。³

- (41) 女の子は賢い。(主題)
 $P: R(Girl, \exists x [Girl(x) \wedge Wise(x)])$
 $A: \forall x [Girl(x) \rightarrow Wise(x)]$
- (42) 女の子は賢い。(対比)
 $P: \exists x [\neg Girl(x) \wedge \neg Wise(x)]$
 $A: \forall x [Girl(x) \rightarrow Wise(x)]$

7. おわりに

以上、日本語の「が」と「は」について、形式的な意味記述を試みた。合計4つの用法と、それに加えて「だけが」も考察し、それぞれに微妙に異なる真理条件および前提をもつことが浮び上がってきた。

同じく前提が関係すると思われる助詞に「も」がある。例えば「奈緒美も賢い」は次のような前提と真理条件をもつと考えられる。

- (43) a. 奈緒美も賢い

³前提の部分の R はここでは属性と命題との関係としたが、属性どうしの関係として、

(i) $P: R(Girl, Wise)$

のように簡単に書いてもよいかもしれない。

b. P: $\exists x [x \neq n \wedge \text{Wise}(n)]$

c. A: $\text{Wise}(n)$

さらに「奈緒美さえ」「奈緒美までも」「奈緒美しか」など、いわゆる「取り立て」の助詞に関わる意味も、本稿のアプローチの拡張として取り扱えると思われるが、それらは今後の課題としたい。

本稿ではデータとして最小対を用いた考察にしたため、例文によってはやや不自然なものもある。より一般的な結論にもっていくには、さらに様々な用例をもって考察する必要があるだろう。本稿はそのはじめの一步を示したにすぎない。

文献

Grice, H. Paul (1968). Logic and conversation. In *Studies in the Way of Words*. Harvard University Press, Cambridge, Mass. Reprinted in *Pragmatics: A Reader*, ed. Steven Davis, Oxford University Press, Oxford, 1991, pp. 305–315.

Gunji, Takao (1987). *Japanese Phrase Structure Grammar*. D. Reidel, Dordrecht.

Horn, Laurence (1969). A presuppositional analysis of *only* and *even*. *CLS*, 5, 97–108.

Karttunen, Lauri & Peters, Stanley (1979). Conventional Implicature. In Oh, C.-K. & Dinneen, D.A. (Eds.), *Syntax and Semantics vol. 11: Presupposition*, pp. 1–56. Academic Press, New York.

Kuno, Susumu (1973). *The Structure of the Japanese Language*. MIT Press, Cambridge, Mass.

Potts, Christopher (2005). *The Logic of Conventional Implicatures*. Oxford University Press, Oxford.

Author's web site: <http://sils.shoin.ac.jp/~gunji/>

(受付日: 2012.1.10)